

李商隱の転機

——「驕兒詩」を中心にして——

加 固 理 一 郎

李商隱の詩歌は、その不遇感の直接的または間接的な反映として読まれることが多い。その不遇については、『旧唐書』以来、牛李の党争との関連によって理解されている。しかし、それは彼の残した作品から明確に読み取れるわけではない。

本論文では、李商隱の不遇を理解する手掛かりとして、『驕兒詩』を採り上げる。それは、この詩が、自身の不遇の原因について最も明瞭な言葉で述べた作品だからである。

この詩は、大中三年（八四九）または四年、三十八歳の時に作られたとされる。次に、その結びの部分を用いる。

……

爺昔好読書
懇苦自著述
顛頽欲四十
無肉畏蚤虱
兒慎勿学爺
読書求甲乙
穰苴司馬法
張良黃石術
便為帝王師
不仮更織悉
況今西与北
羌戎正狂悖
誅赦兩未成
將養如痼疾
兒当速成大

爺は昔読書を好み
懇苦して自ら著述す
顛頽して四十に欲とし
肉無くして蚤虱を畏る
兒よ慎みて爺を学び
読書して甲乙を求むることなかれ
穰苴 司馬の法
張良 黃石の術
便ち帝王の師為るべく
更に織悉なるを仮らざるなり
況んや今 西と北と
羌戎 正に狂悖するをや
誅赦 兩つながら未だ成らず
將養すること痼疾の如し
兒よ当に速かに成大して

探雛入虎窟 雛を探りて虎窟に入るべし

当為万戸侯 当に万戸の侯と為るべく

勿守一絳帙 一絳の帙を守るなかれ

これは、四歳の息子への教訓という形式で、自身の不遇について述べたものである。まず、自分が「読書」と「著述」つまり正統の学問を身に付け、それを詩文に表現することに勉めたものの、経済的困窮を脱せない現状を示す。

そして、息子に対しては、「甲乙」つまり科挙の試験を目指すのではなく、「穰苴司馬法、張良黄石術」に代表される兵法を学び、武人として世に出ることを勧める。それは、「羌戎」の異民族との争いをはじめとする戦乱の頻発により、「将養」つまり軍人が重用される状況を踏まえたものである。

李商隱は、父祖が県令などの下級役人であった寒門の出身である。中唐においては、そのような出身であっても、学問と文才によつて科挙に及第でき、さらに官僚社会での上昇を果たすことができた。しかし、李商隱の置かれた社会状況は、すでに変化していた。それに対応せず、「武」ではなく「文」による社会的上昇を企図したことが、彼自身の語る自分の不遇の原因なのである。彼の不遇について考えるためには、ここから出発すべきであろう。

この詩を一つの材料にして、李商隱の仕官希求者としての挫折像を捉えた研究に、吹野安氏の「李商隱小論——安定城楼・驕兒詩を中心として——」（『東洋文化』復刊第三十八・九合併号、一九七六）がある。吹野氏は、この詩以後、李商隱は仕官を求める自薦上書の文章を作ることが少なくなり、諦めの境に入った。さらに、その後の李商隱が禪の道に心を寄せるようになったことを、その心情の具体的な発露として挙げている。

しかし、挫折の連続であった李商隱の生涯の中で、三十八歳という時点でこの重要な作品が作られた理由が、吹野氏の論考には示されていない。そこで、本論文では、「驕兒詩」前後の李商隱の行動と心情から、この詩に述べられる認識が形成された直接的な理由を追求する。それとともに、この時期に起こった彼の文学的営為の変化についても考察する。

二

「驕兒詩」が作られた大中三・四年前後の李商隱の事跡については、各種の年譜に大差はない。大中元年に秘書省正字を辞し、桂管防禦觀察等使の鄭亜に従い桂州に赴き掌書記となる。翌大中二年二月、鄭亜が循州刺史に左遷され

ると洛陽に帰り、監厓県の尉を経て、大中三年には京兆尹の掾曹となり章奏を担当する。その年の十月、武寧軍節度使の盧弘正の招きに從つて徐州へ赴き判官となり、そのままた大中五年まで在職する。つまり、「驕児詩」は、徐州への赴任直前または在任中に作られたものとなる。この地方と中央をめまぐるしく往来していた時期に、李商隱は読書と著述によつて社会的上昇を圖つた自分の失敗を悟つたのである。その認識は、それまでの経験の総体から得られたものではあるが、その中でも特に桂州での体験が重要な位置を占めていると考えられる。

桂州への赴任は経済的困窮から脱するためのやむを得ない行動であつた。⁽⁵⁾それは、赴任の途上で中央への復歸の希望を記した書状「上度支盧侍郎（盧弘正）状」を作り、また、文字通り「思婦」詩など、桂州の風物を嫌い、故郷を懐かしむ詩を多数作つてゐることから明らかである。

しかし、その一方で桂州の幕府の長官である鄭亜は李商隱を優遇し、李商隱もそれに応えて仕事に励んだ。次に引用する「自桂林奉使江陵、途中感懷、寄獻尚書」詩は、鄭亜に対する感謝を述べたものである。

……

固慚非賈誼 固より慚づ 賈誼に非ざるを

唯恐後陳琳 唯だ恐る 陳琳に後るるを

前席驚虛辱 前席 虚辱に驚き

華尊許細斟 華尊 細斟を許さる

……

既載從戎筆 既に從戎の筆を載するも

仍披選勝襟 仍ほ選勝の襟を披く

……

白衣居士訪 白衣の居士訪ぬ

烏帽逸人尋 烏帽の逸人尋ぬ

佞仏將成縛 佞仏は將に縛を成さんとし

耽書或類淫 耽書は或は淫に類す

……

引用部分では、まず、宴席における鄭亜の細やかな配慮や、職務のついでで景勝地への遊覧といった、公的な場での優遇を述べる。次に、職務とは無関係の宗教への沈潜も容認されていたことが述べられる。この待遇に感謝して、古人には及ばずとも、鄭亜のために自分の文章の能力を発揮するのである。事実、李商隱は桂州において、精緻な駢文体による公用文書の代作を精力的に行つてゐる。⁽⁶⁾

さらに、この時はじめて、李商隱は自作の駢文を編集して文集を作つてゐる。次に、その文集の序文「樊南甲集

序」の前半部分を引用する。

樊南生十六能著才論聖論、以古文出諸公間。後聯為
鄆相國華太守所憐、居門下時、敕定奏記、始通今体。

後又兩為秘書房中官、恣展古集、往往咽噓于任范徐
庾之間。有請作文、或時得好对切事、声勢物景、哀上
浮壯、能感動人。十年京師、寒且餓。人或目曰、韓文
杜詩、彭陽章檄、樊南窮凍。人或知之。

仲弟聖僕、特善古文、居会昌中進士為第一二、常表
以今体規我、而未焉能休。……

樊南生（李商隱）十六にして能く才論・聖論を著
し、古文を以て諸公の間に出づ。後聯りて鄆相國（令
狐楚）・華太守（崔戎）の憐む所となり、門下に居る
時、救められて奏記を定め、始めて今体に通ず。

後又兩たび秘書房中の官となり、恣に古集を展べ、
往往にして任（昉）范（雲）・徐（陵）庾（信）の間
に咽噓す。文を作るを請はるる有らば、或は時に好対
の切事たるを得、声勢物景、哀上浮壯、能く人を感動
せしむ。十年京師に、寒え且つ餓う。人或は目して曰
く、「韓（愈）文杜（甫）詩、彭陽（令狐楚）の章檄
に、樊南窮凍せり」と。人或は之を知るか。

仲弟聖僕、特に古文を善くし、会昌中の進士に居り

て第一二為り。常に表して今体を以て我を規すも、未
だ休む能はず。

引用は、その内容から三段落に分けた。その第三段落で
は、弟の忠告を受けても「今体」つまり駢文を止めること
はできない、という屈折した表現で、自分の文学が駢文で
あることを宣言する。その駢文に通じたのは、第一段落に
記されるように、令狐楚らの幕府で章奏の学を伝授された
ことにはじまる。その後、第二段落到記されるように、秘
書省に勤務しつつ文章の研鑽を続け、一定の社会的評価を
得たが、経済的困窮が続いた。つまり、中央の下級官僚の
立場では、駢文の才能は現実生活の向上に直結しないとす
るのである。

それに対し、鄭亜の幕府では、李商隱は駢文の能力を存
分に發揮し、それによつて主人の信任を得、特別な待遇を
受けた。だから、この序文の冒頭で、自分の駢文は幕府の
文書係の職務と不可分であるとするのである。

このように、自らの文才が活かされる場所を見つけた李
商隱であったが、その直後に大きな挫折が待っていた。鄭
亜は、牛李の党派のうちの李徳裕の党に属していた。この
時期は牛党の勢力が強く、李徳裕への攻撃にもなつて、
鄭亜は罪に問われ循州刺史に左遷される。この時、李商隱

は、鄭亜と李徳裕の冤罪を訴える書状を代作している。そのうち、現存するものに「為滎陽公（鄭亜）上馬侍郎（馬植）啓」および「為滎陽公与三司使大理盧卿（盧言）啓」がある。しかし、これらの書状には何の効果もなく、左遷の決定は覆らなかつた。そして、李商隱自身も鄭亜に従うことはできず、失職した。

この体験から三年後の大中四年に、李商隱が鄭亜に贈つた「猷寄旧府開封公」詩を、次に引用する。

幕府三年遠 幕府 三年遠く

春秋一字褒 春秋 一字の褒あり

書論秦逐客 書は論なふ 秦の逐客に

賦統楚離騷 賦は統なぐ 楚の離騷を

地里南溟闊 地里 南溟闊く

天文北極高 天文 北極高し

酬恩撫身世 恩に酬い身世を撫なんぜんとするに

未覺勝鴻毛 未だ鴻毛に勝るとも覺えず

首聯では、桂州の幕府で鄭亜に文才を認められたことを言う。続く頷聯は、鄭亜が雪冤の文章を作つたことを指す。それとともに、李商隱自身も鄭亜と一体になり、その種の文章を作つたことをも含んでいよう。頸聯は、その文章は朝政に対し影響力を持ち得ないと、婉曲に言つたもの

である。そして尾聯で、鄭亜の恩、つまり文才による重用に酬いたくとも、自分は羽毛のように無力であると結ぶ。

桂州において李商隱は、藩鎮の幕府の文書係の立場から、經濟面だけでなく駢文作家としての精神的な充足を得た。しかし、その直後に、その立場の脆弱さを、身をもつて知つた。精神の高揚のあとの挫折であればこそ、その打撃は大きく、三年の後にも忘却することはなかつたのである。この詩は、「驕兒詩」とほぼ同時期に作られたものである。「驕兒詩」に示された著述行為の無力さに対する認識にも、この体験が反映されていよう。

三

桂州から洛陽に戻つた李商隱は、まず県尉になり、次に京兆尹の文書係になる。「驕兒詩」との関連で、この時期に特筆すべきは、杜牧との接触である。それに關して、李商隱「樊南乙集序」を引用する。

……是年葬牛太尉、天下設祭者百數。他日尹言、吾太尉之薨、有杜司勳之誌与子之奠文、二事為不朽。……是の年（大中三年）牛太尉（牛僧孺）を葬るに、天下に祭を設くる者百數。他日尹言ふ、「吾が太尉の薨ずるや、杜司勳（杜牧）の誌と子（李商隱）の奠文と有

りて、二事不朽為り」と。

この牛僧孺の葬儀に、両者の接触があつたと考えられる。また、李商隱と杜牧の交際の跡を示す史料は、この時期に李が杜へ贈つた二首の詩が残るのみである。

山内春夫氏の「杜牧と李商隱との關係について」(『吉川博士退休記念中国文学論集』筑摩書房、一九六八)をはじめとする先行研究に論ぜられるように、李商隱は杜牧から多岐にわたる重大な影響を受けた。筆者は、「驕児詩」に示された認識の形成にも、杜牧の影響があつた可能性を付け加えたい。

次に、李商隱が杜牧に贈つた詩の一つである「杜司勳」を引用する。

高樓風雨感斯文	高樓の風雨	斯文に感ず
短翼差池不及群	短翼	差池として群に及ばず
刻意傷春復傷別	刻意	春を傷み 復た別れを傷む
人間惟有杜司勳	人間	惟だ有り 杜司勳

この詩の承句は、杜牧と比べた自分の文学的成就の低さを言っているが、さらに、それにより得られた官位の高低の差をも含むと思われる。李商隱「幽居冬暮」詩の、

羽翼摧殘日	羽翼	摧殘する日
郊園寂寞時	郊園	寂寞の時

は、翼をそこなうことを、官界での不遇の比喩としてい
る。「杜司勳」詩の「短翼差池」も同様であろう。この時
に杜牧は、司勳員外郎で史館修撰を兼ねていた。文才を頼
りに官界で生きる者として、李商隱に比べれば恵まれた地
位にあつたのである。

その杜牧に、「驕児詩」と類似した叙述の形式ながら対
照的な内容の「冬至日寄小姪阿宜詩」がある。その製作年
代は不明だが、杜牧の生涯にほとんど変わらない意識を反
映した作品であろうと思われる。これを次に引用する。

勤勤不自已	勤勤として自ら已まざれば
二十能文章	二十にして文章を能くせん
仕宦至公相	仕宦して公相に至り
致君作堯湯	君を致して堯湯と作さん
我家公相家	我が家は公相家にして
劍佩嘗丁当	劍佩嘗て丁当たり
……	……
第中無一物	第中 一物無く
万卷書滿堂	万卷の書 堂に満つ
……	……
朝廷用文治	朝廷 文治を用ひ

大開官職場 大ひに官職の場を開く

願爾出門去 願ふ 爾 門を出でて去り

取官如驅羊 官を取ること羊を驅るが如きを

……

崔昭生崔芸 崔昭 崔芸を生み

李兼生窟郎 李兼 窟郎を生む

堆錢一百屋 錢を堆すこと一屋なるも

破散何披猖 破散して何ぞ披猖たる

……

これは、幼い甥に対する教訓の詩である。ここに述べられた社会状況の認識は、「驕兒詩」とは正反対で、「朝廷用文治、大開官職場」つまり朝廷が学問を重視し、文官に活躍の場を与えているとされる。杜牧は、「我家公相家」と、宰相杜佑の孫という家柄を誇りとし、「万卷書滿堂」の家学に依拠して、学問による立身出世を若い世代に勧める。名門であっても経済力のみを頼れば、「崔」「李」の子弟のように没落の道をたどることになるからである。つまり、杜牧と李商隱の社会認識の相違は、その出自の違いによるところが大きいのである。

桂州での挫折の体験を経た李商隱は、京師にて不本意な職につき心楽しまない日々を過ごしていた。その時、名門

意識を持ち、学問と文章による社会的上昇の可能性を感じ、それを実現していると見なされる杜牧と会った。この出会いによって、寒門出身の自分が上昇を求めることの困難な社会状況を、より鮮明に意識したのではないかと思われる。

四

京兆府での短い生活の後、李商隱は徐州の盧弘正の幕府に赴任する。先に述べたように、「驕兒詩」はこの赴任と前後して作られた。次に、この時期の李商隱の意識と行動、そして文学に対する態度の変化について検討する。

徐州への赴任もまた、経済的な困窮を一つの動機とする¹⁰。しかし、桂州の時に比べると、今回は、幕府への赴任に対する積極性が感じられる。徐州での李商隱の作品の一つに、次に引用する「題漢祖廟」詩がある。

乘運応須毛八荒 運に乗じては応に須らく八荒を宅とすべし

男兒安在恋池隍 男兒安んぞ池隍を恋ふに在らんや

君王自起新豊後 君王 新豊を起つるより後

項羽何曾在故郷 項羽 何ぞ曾て故郷に在らん

徐州には漢高祖の廟があった。李商隱は、転戦の果てに

勝利を得た劉邦の姿を思い、各地を転々とする自分の状況を肯定しようとするのであろう。これは、桂州の風物が常に厭わしく、望郷の念を起こさせるものとして詠まれているのとは対照的である。この積極性は、「驕児詩」に示された文武に対する認識の反映であろう。兵法を学んで武人になることを息子に勧めるのは、あくまでも極論である。自分自身の現実的な処世としては、中央の文官よりも、藩鎮の幕府への赴任を求めるということになるのである。幕府に対する積極的な意識は、次に引用する徐州の同僚たちに贈った詩「偶成転韻七十二句、贈四同舎」にも示される。

……
此時聞有燕昭台
挺身東望心眼開
且吟王粲從軍樂
不賦淵明歸去來
彭門十方皆雄勇
首戴公恩若山重
延評日下握靈蛇
書記眠時吞綵鳳

……
此の時聞く 燕昭台有るを
挺身東望して心眼開く
且つ吟ず 王粲の從軍樂を
賦せず 淵明の歸去來を
彭門十方 皆雄勇たりて
首に戴く 公の恩 山の若く重きを
延評は日下に靈蛇を握り
書記は眠る時綵鳳を吞む

引用部分の「燕昭台」は、盧弘正の幕府を指す。馮浩『玉谿生詩集箋注』卷二に引用された田蘭芳の評に「傲岸激昂、儒酸一洗。」とあるように、この詩は、雄壮な作風で幕府に招かれた感激を詠む。

ただし、李商隱は幕府にあつても軍人ではなく文吏である。先に述べたように、桂州において彼は藩鎮の幕府の文書係という職の優越性とともに、その限界を知った。この詩では、「彭門十方」の二句で軍人たちを詠んだ後に、文書係の「延評」「書記」が登場する。これは、文吏が幕府において副次的な存在であることを表したものである。徐州でも、李商隱はやはり文書係としての仕事に励む。しかし、彼はもはやその職務から文章家としての充実感を過剰に求めない。むしろ、職務とは直接関係しない、詩歌を通じて交友に心を傾けていたと考えられる。¹¹⁾徐州で同僚の李枢言との交際をうたった長編の詩に、「戲題枢言草閣三十二韻」がある。次に、その一部を引用する。

……
我雖不能飲 我飲む能はずと雖も
君時醉如泥 君 時に酔ひて泥の如し
……

君時臥根触
勸客白玉杯
苦云年光疾
不飲將安帰
我賞此言是
因循未能諧
君言中聖人
坐臥莫我違
榆莢乱不整
楊花飛相隨
上有白日照
下有東風吹
青樓有美人
顔色如玫瑰
歌声入青雲
所痛無良媒
少年苦不久
顧慕良難哉
徒令真珠脱
裏入珊瑚腮
君今且少安

君 時に臥して根触し
客に白玉の杯を勸む
苦ねんごうに云ふ「年光疾く
飲まざれば將に安くにか帰せん」と
我は此の言是なりと賞すも
因循して未だ諧す能はず
君言ふ「聖人に中り
坐臥して我違ふなし」と
「榆莢乱れて整はず
楊花飛びて相隨ふ
上に白日の照らす有りて
下に東風の吹く有りて
青樓に美人有りて
顔色 玫瑰の如し
歌声 青雲に入り
痛む所 良媒無し
少年 久しからざるを苦しみ
顧慕 良に難きかな
徒らに真珠の脱をして
裏して珊瑚の腮に入らしむ」
君 今且く少しく安んじ

聽我苦吟詩 我の詩を苦吟するを聴け

古詩何人作 古詩 何人の作る

老大猶傷悲 「老大 猶ほ傷悲せん」と

李商隱には、交遊の詩は比較的少ない。その中でも、この詩は平易な表現で真情あふれる作風を示している。ここで引用したのは、詩の後半、両者の飲酒の様子を描写した部分である。酒を勧められても飲めない李商隱に対し、李柩言は酒の魅力を語る。それに答えて李商隱は詩を「苦吟」し、友人に思いを伝える。

この詩はまた、「驕兒詩」で示された自己の不遇と表現行為との関係について、さらに別の一面を展開したものである。この「榆莢乱不整」から「裏入珊瑚腮」までは、いわば詩中の詩である。これは、「美人」が実らぬ恋に嘆く艷詩に、自己の不遇感を仮託したものである。そして、その艷詩の前後には、それを作る自分自身の姿が客観的に描写される。それは、不遇感をもたらず憂鬱な現実を、華麗な虚構に表現することが、飲酒にもまさる癒しであるのを示したものである。読書と著述は、不遇の誘因であった。しかし、それを認識してもなお、詩歌を苦吟する表現行為をやめることはできない。なぜならば、それが不遇感を昇華する唯一の手段だからである。

このような自己の不遇と文学との関係に対する客観的な把握は、李商隱の詩作に新たな境地を開いたと思われる。その境地を示唆する作品として、次に「蟬」詩を引用する。

本以高難飽 本ともと高きを以て飽き難く

徒勞恨費聲 徒らに勞す 恨みて声を費やすを

五更疎欲斷 五更 疎にして断えなんとし

一樹碧無情 一樹 碧にして情無し

薄宦梗猶泛 薄宦 梗 猶ほ泛かび

故園蕪已平 故園 蕪れて已に平らかなり

煩君最相警 君を煩はす 最も相警しむるを

我亦拳家清 我も亦家を拳げて清し

この首聯・頷聯は、蟬の生態を伝統的な認識に従って表現したものである。続く頸聯は、自分の現状を記したものであるが、それによって、この詩の蟬が、不遇な詩人である自己を仮託したものであることが示される。「本以高」つまり詩人としての高みを求めることは、「難飽」という不遇の状態の根本的原因である。その不遇を「恨」み、「声」を「費」やして詩文を作り続けるが、それが「徒勞」であることは分かっている。なぜならば、「一樹」にたとえる他者は「無情」で、詩文に心動かされて救済の手を差

し延べることはないからである。そのために「薄宦」の自分分は、「梗」つまり木彫りの人形が水に流されるように地方の幕府を転々とし、「故園」を荒れるにまかせられるのである。そして尾聯は、「君」つまり蟬に対す呼びかけである。この蟬は自己の仮託なのであるから、呼びかけている「我」は、不遇な詩人としての自己を客観視するもう一人の自分である。その「我」が、清貧に甘んじる諦念を語って、一首が結ばれる。

この詩に見られるように、李商隱が不遇の詩人としての自己を、諦念をもって客観的に表現するに至るまでには、本論文で論じた精神の遍歴があつたのではなからうか。この詩は、大中五年の徐州での作とされるが、確かにこの時期の作品にふさわしい。

むすび

中央の官僚として満足な地位の得られない李商隱は、藩鎮の文書係となる。彼は、この職から経済面だけでなく文章家としての精神的な充足をも得ることができた。しかし、この職の政治的な非力さ、不安定さも痛感した。もはや、いかなる形であれ、寒門出身の自分が、文章の能力だけでは不遇から脱せない社会状況が形成されていること

を、彼は感じたのである。こうして形成された自己の不遇についての認識を、李商隱は「驕兒詩」に記した。

李商隱は、大中五年に盧弘正の死去により徐州の幕府を去った後、その翌年には梓州刺史東川節度使柳仲郢の幕府に赴く。そして大中十年に柳とともに京師に帰り、大中十二年に没する。後半生の李商隱は、中央官僚の地位を諦め、藩鎮の幕府に安住の地を求め、「驕兒詩」に述べられた認識を得たことは、実生活での転機となつたのである。また、この認識から導かれる自己の不遇と文学との関係の客観的な把握は、詩人としての自己表現の転機にもなつたと考えられる。

注

(1) 張采田『玉溪生年譜會箋』では、大中三年・三十八歳の作とするが、葉葱奇氏は『李商隱詩注疏注』（人民文学出版社、一九八五）の年譜で李商隱の生年を一年繰り下げたため、大中四年・三十八歳の作とする。

(2) 李商隱の詩の引用は、劉学鐸・余恕誠『李商隱詩歌集解』（中華書局、一九八八）による。

(3) 『旧唐書』の李商隱伝には「……曾祖叔恆、……位終安陽令。祖補、位終邢州録事參軍。父嗣、……」とある。また、川合康三氏は『中国の自伝文学』（創文社、一九九六）Ⅴ 詩の

中の自伝」で、韓愈が息子に示し、無一物から勉学に励んで地位を得たことを語る「符讀書城南」詩や「示兒」詩と、李商隱の「驕兒詩」とを比較する。そして、両者の息子に対する教訓の内容に相違がある理由の一つとして、寒門の学問が報われなくなる中唐から晩唐への時代の変化を指摘する。

(4) 「驕兒詩」と同様な認識が、「漫成五章」詩にも述べられることは、詹滴江氏が「李商隱の「漫成」詩二組について」（『芸文研究』第五十四号、一九八九）で指摘している。しかし、「漫成五章」詩は許される解釈の幅が広く、筆者の意図からして本論文では触れなかつた。

(5) 「酬令狐郎中（令狐綯）見寄」詩に、この間の事情が「補羸貪紫桂、負氣託青萍」と記される。これは、「紫桂」を食べて体力をつける、ということと桂州赴任が経済的理由によることを示し、「青萍」の剣にたとえられる志は別にある、ということなのである。

(6) 桂州時代の李商隱の駢文作家活動については、拙稿「李商隱の代作の態度について——『太尉衛公会昌一品集序』を中心にして——」（『中国文化』第五十二号、一九九四）を参照されたい。

(7) 李商隱の文章の引用は『樊南文集』（上海古籍出版社、一九八八）による。

(8) 程夢星は、この詩の評の中で、「蓋以牧之之文詞、三歷郡而後内遷、已可感矣。然較之於己短翼雌伏者不猶愈耶。」と述べる（朱鶴齡箋注・程夢星刪補『李義山詩集箋注』卷上）。これ

も「短翼」が官位の低さのたとえとするものである。

(9) 引用は『樊川詩集注』（上海古籍出版社、一九七八）による。

(10) 李商隱「上尚書范陽公（盧弘正）啓」一に「……無文通半頃之田、乏元亮數間之屋。隘傭蝸舍、危託燕巢。……」とある。

(11) 劉学鍇氏は『李商隱詩歌研究』（安徽大学出版社、一九九八）「十一、李商隱生平若干問題考辨（四）徐幕奉使」で、徐州から使者として出向いた李商隱が、李郢と各々二首の詩を取り交わしたことについて考証する。これも、この時期の李商隱の文学による交友に関する重要な研究である。

(12) この詩の構成には異説もあるが、ここでは前出劉学鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』の按語に従った。

(13) この詩の自己認識の特徴を、文学史的展開の中でとらえた研究に、川合康三氏「蟬の詩に見る詩の転変」（『中国文学報』第五十七冊、一九九八）がある。

（横浜市立大学）